巻　頭　言

情報システムの将来

河　野　忠　義*

情報処理学会は本年4月をもって15周年を迎えることとなり，まことに御同慶の至りである．学会設立当初から学会に関係をもつものとして，特に設立後の苦難の時期に学会経理を担当したものとして，今日の発展の姿を見ることはまさに隔世の感に堪えない．

これまでの学会の歴史を跡づけて見ると，草創期の赤字に悩んだ第1世代，ようやく財政的基盤が固まり，とくに懸案であった日米コンピュータ会議を成功裏になしとげた第2世代を経て，いよいよ本年からは隆々発展の第3世代の幕あけといえるのではなかろうか．

現在，会員数は約7,000名ということであり，これを大別すれば，コンピュータを作ることにかかわりをもつ人と，コンピュータを使うことにかかわりをもつ人に区分されるであろう．さらにこれらの人々は，教育訓練，研究開発，生産やサービスの提供に分類できるであろう．コンピュータ技術とその利用の発展は必然的に専門化と細分化をもたらしつつあり，したがってこの6つの領域をもったマトリックス構造はさらにこまかい基盤目に細分されるであろう．今日それぞれの会員がこのマトリックス上のどの位置にあり，その分布がどうなっているか，さらにその母集団の分布とどのような相関関係にあるかはきわめて興味深いことでもあるし，学会の今後の発展策を考える上で土台となる情報ではなかろうか．

ところで学問技芸の専門分化に伴い，会員はそれぞれ細分化された専門領域で仕事をスタートし，その延長線上でキャリアを蓄積してゆくことになる．毎号の学会誌に掲載される論文は，それぞれ限られた領域の専門家にとっては価値ある情報であったとしても，その他の会員にとっては活字の集合以外の何ものでもないであろう．

しかしながらコンピュータが人類社会にますます活用の度合いを高めてゆくためには，前述のマトリックスの6つの領域の間にコミュニケーションのチャネルが存在することがますます必要なこととなるであろう．コンピュータを作り出す側と，コンピュータを利用する側との間の断層はますます深刻な事態となりつつあることは否定すべくもない．このような問題への一つのアプローチとして，学会誌の中に会員の多数が興味をもって参加できるような広場を設けることを提案したい．この広場をどのように設計するかを，賢明な編集委員会の各位にお願いしたい．専門家による，できるだけ広くかつ高い立場からの専門領域についての解説，あるいは一つの専門領域から他の専門領域への提言など，これはほんの思い付きの域を出ないものである．よろしく検討をお願いしたい．

1月号ともなれば，将来の話題にふれるのが恒例であろう．コンピュータを土台とした情報システムが現在どのような発展段階にあり，将来どのように発展してゆくのであろうか．限られた紙面でもあり，私の考えの枠組を述べて大方の御批判をあおぎたい．

私は今三つの2次元平面上に位置づけることを考えている．第1は用途に関する平面であり，そのX軸には「論理」を，Y軸に「記憶」をとることにする．第2は機能に関する平面であり，X軸には「応答の速さ」を，Y軸には「処理能力」をとる．第3はシステムに関する平面であり，X軸には「人間を含まないシステムそのものの進歩」を，Y軸には「人間を含んだシステムとしての発展」をとることとしている．

これを要するに，コンピュータを土台とした情報システムの将来は二つの観点から眺めることができるであろう．一つは人間とコンピュータがそれぞれのもつ能力を最高度に発揮しつつ共存する情報システムの開発がどのように進展するかであり，他は情報システムのユティリティ化が何時どのような形で社会に具体化するであろうかということである．

最後に，情報処理学会の発展を祈って，この小文を終ることとする．

* 本会監事（株）日立製作所システム開発研究所